

宮崎議員（自民議連）

令和4年12月14日  
教育長答弁実録  
（教育委員会）

（問）小規模校の意義について

令和4年2月定例会において、「中山間地域などにある小規模校の存在意義をどう認識しているのか」と質問したところ、教育長は、「地域の次代を担う人材の育成という観点からも、非常に重要な役割を担っているものと考えている。次期計画においては、十分配慮する必要があると考えている。」と答弁したが、この「配慮」とはどのような配慮なのか、教育長に伺う。

また、1学年1学級規模の高等学校は、全校生徒数80人を一つの目安としているが、「今後の県立高等学校の在り方に関する基本計画」を策定した当初から、社会環境が劇的に変化している今、この80人という基準も弾力的に見直す必要があると考えるが、そもそも、この基準はどのような考えに基づいて決められたのか、併せて教育長に伺う。

都市部は、学校も多く私学も含め選択肢が沢山あるが、中山間地域のように交通の便が悪く、生徒数が少ない地域においては、地元の公立高校しか選択肢がない。また、小規模校は地域の次代を担う人材の育成の観点からも、非常に重要な役割を担っており、学校が無くなることで、地域に与える影響は少ない。こうした地域の教育こそ、公立が担うべきと考えるが、公立の小規模校が担う役割、公立高校の意義について、併せて教育長の所見を伺う。

（答）

まず、令和4年2月定例会において御答弁いたしました「配慮」についてでございます。

いわゆる小規模校、とりわけ中山間地域に所在する学校につきましては、地域の次代を担う人材の育成という観点からも、非常に重要な役割を担っているものと考えております。

このため、「次期計画」におきましては、県立高等学校の課程・学科の在り方や、配置及び規模の在り方などに係る方向性をお示しする中で、今後の児童生徒数の推移や公共交通機関の利便性などの中山間地域の実情等を踏まえ、当該地域に所在する高等学校が担う役割等を十分考慮したものとなるよう「配慮」する必要があると考えております。

次に、80人の基準の考え方についてでございます。

1学年1学級規模の高等学校につきましては、生徒数や教職員数が少なく、

教科等における学習活動や行事等の特別活動，さらには部活動等で制約が生じやすくなることなどから，生徒が授業等において一定の選択幅を持つことができ，集団の中で切磋琢磨できる環境を整えるためには，少なくとも，3学年分の収容定員120人の3分の2となる80人を確保する必要があると整理したところでございます。

最後に，公立高等学校の意義と公立の小規模校が担う役割についてでございます。

高等学校につきましては，今日では，中学校を卒業したほぼ全ての生徒が進学する教育機関となっており，この中で，公立高等学校の意義といたしましては，様々な背景を持つ生徒が，多様な能力・適性，興味・関心等に応じた「個別最適な学び」や「協働的な学び」を通じて，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を身に付けることができるようにすることであると認識しております。

また，小規模校が担う役割につきましては，小規模校ならではのメリットを生かし，

- ・ 生徒一人一人に寄り添い，特性や学習進度等に応じて指導方法や教材，学習時間等を柔軟に設定するなどの「指導の個別化」や，生徒の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じた学習課題を提供するなどの「学習の個性化」を充実すること，
- ・ 小集団で機動的に活動できることを生かし，地元地域をフィールドとした実践的な学習活動等をより多く実施することを通して，地域への愛着や誇りを育み，将来的に地域に定着し，貢献できる人材を育成すること

などがあり，そうした効果が発揮できるよう取り組んでいるところでございます。

県教育委員会といたしましては，引き続き，全ての子供たちが，一人一人の適性や興味・関心などに応じた個別最適な学びにより，右肩上がりに成長できるよう，小規模校で得られた学習効果も生かしながら，より一層の学校の特色づくりの推進や教育の質的向上などに努めてまいりたいと考えております。